

京都大学	博士 (生命科学)	氏名	中川智絵
論文題目	先端科学技術を巡る専門家と非専門家を交えた議論のあり方の研究：再生医療を事例に		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>科学技術が社会の中でより良い存在となるために、科学技術の専門家、政策担当者、利害関係者、市民など多様な主体が参加する議論の重要性が指摘されている。このことは、1999年に開催された世界科学会議のブタペスト宣言や日本政府における科学技術基本計画においても強調され、基礎研究から応用技術の開発・導入場面まで、広く科学技術に関して必要な活動とみなされている。さらに、こうした議論を、研究開発の初期段階の具体的な応用技術のイメージが明確でない時期、すなわち「上流」の段階で行うことが、意見や価値観のずれを固定化しないために重要であると言われている。</p> <p>それでは、多様な専門家や非専門家を交えた議論を意味あるものにするにはどうすれば良いのか。これが本研究の問題意識である。具体的には、社会に大きな影響を与える先端科学技術として再生医療を取り上げ、専門家と非専門家が参加する議論の実践を通して、「上流」段階での社会的議論のあり方や可能性を検討することを目的とした。</p> <p>まず、非専門家に着目し、非専門家が再生医療に対して、どのような興味・関心を持つのかを新聞記事との比較によって示した。その結果、以下の三つの特徴を見いだした。非専門家は、①社会導入後に興味・関心を持ち、②技術そのものの安全性とともに、技術の管理・運用について興味・関心を持つ。また、③再生医療の利用という直接的影響の他にも、社会の価値観の変化などの間接的影響にも注目している。この結果から、非専門家の視点が潜在的な社会的論点の可視化に有効である可能性が示された。</p> <p>次に、再生医療に関する論点を抽出し、取り上げるべきアジェンダを作成することを目的とした実践活動「熟議キャラバン2010」を利用し、以下の三つの問いを検討した。</p> <p>(ア) 専門家と非専門家の「視点」には差異が見られるのか、見られるとするならどのようなものなのか。(イ) 専門家と非専門家の議論において共同のアジェンダを設定することは可能であるか、また、議論の中で専門家はどのような振る舞いをするのか。(ウ) 専門家と非専門家を交えた議論、および熟議キャラバン2010にどのような意義があったのか、特に専門家にとって学習の場となり得たのか。</p> <p>「熟議キャラバン2010」には主に二つの段階があった。専門家を含む多様な主体から再生医療に関する論点を収集する段階と、得られた論点を基に、専門家と非専門家が共同で、社会で取り上げるべきアジェンダを作成する「アジェンダ設定会議」であった。</p> <p>(ア)に対しては、専門家は再生医療の実用化前に着目し、非専門家は実用化後に着目するという差異があることがわかった。(イ)に対しては、熟議キャラバン2010における「アジェンダ設定会議」で作成されたアジェンダと論点の関連の分析と、アジェンダ設定会議に参加した専門家対象のインタビュー調査から、アジェンダには専門家と非専門家、双方の視点が反映されていたこと、専門家は非専門家が発言しやすい環境を作り、アジェンダは双方の協力のもと作成されたことがわかった。(ウ)に対しても、(イ)と同様のインタビュー調査の結果より、専門家にとって政策へのインプットは重要視されず、学習の場として意味のあるものだったこと、および、専門家の非専門家の意見の捉え方には少なくとも2種類あることが明らかとなった。</p> <p>最後に、上記の結果より、実践活動を実施する際のポイントについて考察し、先端科学技術を巡る専門家と非専門家の議論のあり方について、三つの示唆を得た。それらは、(a) テーマ設定、(b) 情報提供の仕方、(c) 政策との関係、に関するものであった。</p> <p>全体として、先端科学技術を巡る専門家と非専門家を交えた議論における専門家と非専門家の意見の差異や専門家の振る舞い方、専門家にとっての参加意義を明らかにすることを通して、専門家と非専門家が参加する議論の場を効果的に設計するための留意点などを明らかにすることができた。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、社会に大きな影響力を持つようになった科学技術が社会の中でより良い存在となるために実施される、専門家と非専門家が参加する社会的議論のあり方や可能性を、実践を通して検討したものである。本論文では、研究対象となる科学技術として再生医療をとりあげている。研究の前半部においては、論点抽出型のワークショップを行い、非専門家の再生医療に対する興味・関心を収集し、新聞との比較によって、その特徴を明らかにした。さらに、この非専門家の興味・関心の特徴より、非専門家が未だ社会に顕在化していない論点の指摘を行うこと、また、これらの論点が過去に論争となった科学技術についての議論で上げられた論点と類似することから、再生医療を巡る議論に非専門家を交えることの必要性を指摘している。これらを受けて、後半部では、実際に専門家と非専門家が参加した実践活動を利用し、参加者の意見の分析や参加した専門家へのインタビューを行い、専門家と非専門家の視点の相違、専門家の議論の場での振る舞いや、専門家にとっての非専門家を交えた議論の場の意義などを明らかにした。そして、最後に、これらの結果より、今後、科学技術を巡る専門家と非専門家を交えた議論を実施する際に役立つ知見を導き、示した。

これらの知見は、再生医療のみにとどまらず、社会に大きなインパクトを与えうる生命科学の研究が、社会の中でより良い存在となるために重要であると考えられる。さらに、生命科学研究の社会との適切な関係構築のためにも大きく貢献するものと思われる。

上記の内容により、本論文は博士（生命科学）の学位論文として価値あるものと認めた。平成24年1月26日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日